



能 金剛流「清経」  
金剛 永謹

ユネスコによる  
人類の無形文化遺産「能楽」

# 納涼能

第四十二回

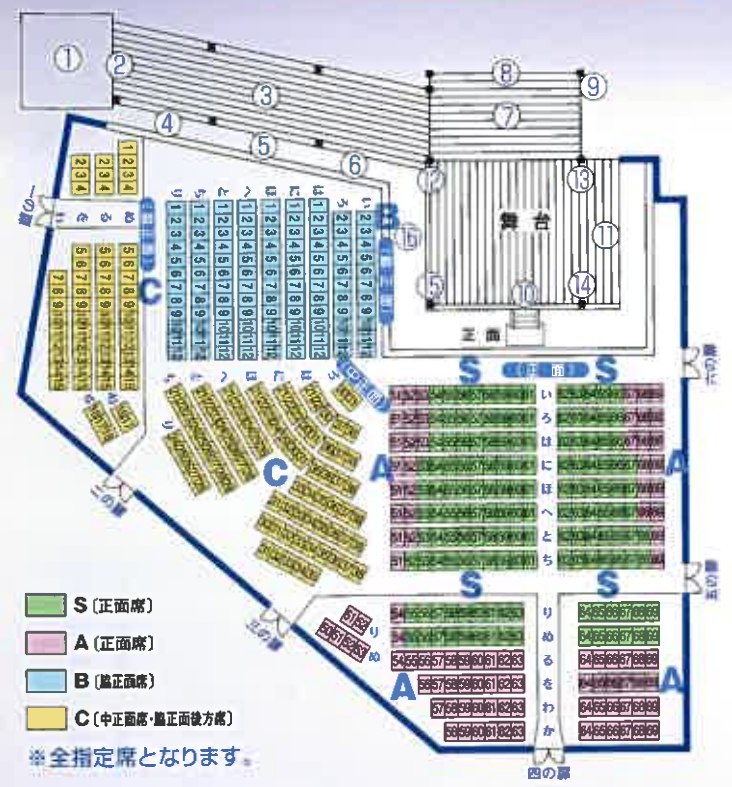
2019年7月19日(金)  
開場 午後1時 開演 午後2時  
会場 宝生能楽堂  
主催 公益社団法人能楽協会 東京支部

ごあいさつ

元号も改まり、新しい時代の幕が開きました。  
納涼能には日頃からご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。  
シテ方五流総出演はもとより、本格的な能楽公演として企画致しましたところ、  
能「清経」「杜若 沢辺之舞」共に間狂言がございませんので、今回は狂言小舞を組み入れました。  
お暑い折ですが皆様のご来場を心よりお待ちしております。

東京支部長 朝倉 俊樹

宝生能楽堂座席表(舞台平面図)



■ 舞台平面図

① 鏡の間	② 揚幕	③ 橋掛り	④ 三の松
⑤ 二の松	⑥ 一の松	⑦ 後座	⑧ 鏡板
⑨ 切戸口	⑩ 階(きざし)	⑪ 地謡座	⑫ シテ柱
⑬ 笛柱	⑭ ワキ柱	⑮ 目付柱	⑯ 白州

能楽堂とは  
能を上演する専用の舞台を能舞台といい、四本の柱に囲まれた三間(約6m)四方の本舞台を中心として、右側に地謡座、正面奥に後座と松の描かれた鏡板をもち、左側に長さ四間ほどの橋掛りを備えた独特な形をしています。  
この能舞台は元々屋外にあり、野天の白州や対面する建物が客席になっていましたが、明治以降、屋根付きの舞台と付随する楽屋、客席ごと建物に収容され、能楽堂と呼ばれるようになりました。  
昔ながらの屋外舞台も全国に数十カ所現存しています。

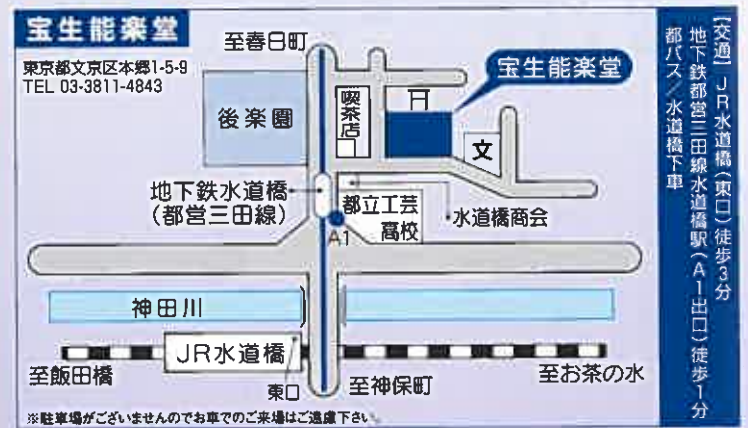
【チケット料金】(税込) 全席指定  
S席・・・8,000円 B席・・・5,000円  
A席・・・6,000円 C席・・・4,000円  
※各座席区分は前ページ座席表をご参照下さい。  
※本公演は未就学児のご入場をご遠慮頂いております。

【チケット発売開始日】  
4月19日(金) 午前10時より

【チケット取り扱い】 ※販売は下記に限り承ります。  
◆ 電話  
チケットスペース ▶ 03-3234-9999 (有人対応)  
◆ インターネット  
E+イプラス ▶ <http://eplus.jp/> (PC・携帯共通)  
◆ 店頭  
E+イプラス ▶ ファミリーマート全国各店舗 店内 famiポート

【前売チケット発売期間】 4月19日(金)～7月12日(金)  
◎前売チケットは販売期間終了前に完売することもございます。予めご了承下さい。

【当日券】 宝生能楽堂ロビー受付にて 午後1時より 販売開始  
◎残席がある場合のみ販売致します。



◆ 公演に関するお問合せ ◆ ※チケット販売受付は致しませんので予めご了承下さい。  
公益社団法人能楽協会 東京支部 ☎03-5925-3871 / <http://www.nohgaku.or.jp/>

番組

三二講座 東川 尚史

能(金剛流)

清経

ツレ(清経の妻) 宇高 徳成  
シテ(平清経) 金剛 永謹

ワキ(粟津三郎) 安田 登

大鼓 大倉正之助  
小鼓 古賀 裕己

笛 寺井 義明

後見 廣田 幸繪  
山田 純夫

地謡 熊谷 伸一 元吉 正巳  
遠藤 勝實 金剛 龍謹  
見越 文夫 宇高 通成  
田村 修 坂本立津朗

狂言 樋の酒

主人が外出するので、酒蔵と米蔵の番を任せられた二人の家来。やがて酒蔵の次郎冠者は、酒の盗み飲みを始めてしまいます。その様子を蔵の窓越しに見ていた米蔵の太郎冠者も酒を欲しがりますが、番をしている蔵を空けることはできません。次郎冠者は長い樋を持ち出して、窓越しに酒を流して太郎冠者に飲ませますが...

狂言(和泉流)

樋の酒

シテ(太郎冠者) 野村 万蔵

アド(主) 能村 晶人  
アド(次郎冠者) 野村万之丞

後見 河野 佑紀

休憩 二十分

〔四時頃〕

小舞(大藏流)

猿

舞 大藏彌太郎

地謡

吉田 信海  
大藏 基誠  
大藏 教義  
小梶 直人

仕舞(喜多流)

道明寺

香川 靖嗣

地謡

大島 輝久  
長島 茂  
中村 邦生  
金子敬一郎

仕舞(親世流)

班女

舞 梅若万三郎

地謡

柴田 繪  
青木 一郎  
坂井 音重  
弘田 裕一

仕舞(金春流)

殺生石

金春 憲和

地謡

辻井 八郎  
本田 光洋  
高橋 忍  
山井 綱雄

能(宝生流)

杜若

シテ(杜若の精) 宝生 和英

若

沃辺之舞

ワキ(旅僧) 工藤 和哉

大鼓 柿原 崇志 大鼓 金春 國直  
小鼓 森澤 勇司 笛 藤田 次郎

後見 辰巳満次郎  
高橋 憲正

地謡

小林 晋也 藤井 雅之  
小倉伸二郎 武田 孝史  
水上 優 金井 雄資  
山内 崇生 高橋 亘

附祝言

〔終了予定 午後五時三五分〕

お願い

・場内での撮影・録音・録画は固くお断り致します。  
・場内では携帯電話の電源・時計のアラーム等をお切り下さいませようお願いします。  
・出演者はやむを得ぬ事情により変更させて頂く場合がございます。予めご了承下さい。

能 清経

世阿弥作の平家公達の修羅能です。粟津三郎は、清経が平家の前途に失望して、豊前柳ヶ浦の沖で入水した後、形見の髪を都に持ち帰り、清経の妻に渡します。妻は夫の入水を知り、驚き悲しみますが、形見の黒髪は悲しみを増す種になると、手向け返します。妻が涙ながらに微睡んでいると、その枕辺に清経の亡霊が現れます。清経は、妻が形見を返したことを咎め、妻も、夫が自ら命を絶つたことを怨み、互いに怨みを言い合います。やがて清経は、平家滅亡の悲しい運命と、自ら入水自殺した時の模様を語ります。更に、死後に墜ち行つた修羅道の苦思の様を見せませんが、入水の際に唱えた念仏の功德で、成仏できたことを感謝して消え失せます。

小舞 猿

能「嵐山」の替間で演じられます。吉野山の猿が嵐山の男猿のもとに狸入りをし、やがて酒宴になり、踊り舞います。この謡は狂言「猿」でも謡われるものです。

仕舞 道明寺

河内国土師寺(道明寺)にある木徳樹の実を求めにきた僧の前に、白太夫の神が現れ、自分は白太夫の神だと言つて消え去ります。

僧の夢に天女が現れ舞を舞い、白太夫の神は笏拍子を打ち舞奏を舞います。

そして僧に木徳樹の実を与えて消え去ります。

仕舞では木徳樹の実を与える部分を演じます。

仕舞 班女

吉田少将への想いから勤めを怠り、野上の宿を追い出された遊女・花子。後日、少将が下賀茂神社で出会つた狂女・班女こそ、かつての花子なのでした。仕舞では恋心を崩になぞらえ班女が舞う場面が演じられます。

仕舞 殺生石

那須野にある巨大石は、以前帝を病に倒れさせた悪霊で、石を割つて姿を現すと、僧の念仏により成仏し以後悪事を行わないと誓い姿を消します。

仕舞では悪霊が執心となつた有様を見せ、成仏を感謝する終曲部を演じます。

能 杜若

諸国を巡る僧が三河国八橋で沃辺に咲く杜若を眺めていると一人の女が現れ、ここは杜若の名所で昔在原業平が「かきつばた」の五文字を句の上に置き、「唐衣着つつ馴れにし妻しあれは通々来ぬる旅をしぞ思ふ」と古歌を詠んだ事を語り、自分の庵に僧を案内します。女は、そこで装いを替え自分は杜若の精であると明し、かつて業平が歌舞の菩薩の化身として現れ、衆生済度の光を放つ存在であり、その和歌の言葉は非情の草木をも救いに導く力を持つと語り、幻想的で艶やかな舞を舞い、夜明けと共に姿を消すのでした。今回は沃辺之舞という小書(特別演出)により、初冠に藤の花と日陰の糸と呼ばれる飾り紐を付け、腰には太刀を佩きます。また、序之舞の中で、橋掛りへ行き辺りを見回すという演出が盛り込まれ、より一層華やかになります。